

追悼号

国際京都学だより

「米山俊直先生を偲ぶ会」

二〇〇六年五月二十八日（日）
午後二時から
すまじょうホテル

国際京都学だより

追悼号 二〇〇六年（平成十八年）十一月十日（金）

編集 国際京都学協会事務局

〒六〇四八三八三 京都市中京区西ノ京小堀町二五三

ホームページ <http://www.kyotogaku.org/>

電子メール info@kyotogaku.org

発行 国際京都学協会

題字は書家・杭迫柏樹（くいせこはくじゆ）氏

「米山俊直先生を偲ぶ会」

二〇〇六年五月二十八日（日）
午後二時～午後四時
からすま 京都ホテル

あいさつ

国際京都学協会理事長 芳賀 徹

今日の午前中、二条駅の近くの弥生会館で国際京都学協会の理事会が開かれました。これは米山俊直先生が創始者となって、その第一代理事長を務めてこられた協会でございますが、その米山先生が亡くなられたあと、先生の志を受け継いで私が二代目を務めるということになりました。その芳賀徹でございます。京都では、いま造形芸術大学の学長を務めております。

今日は「米山先生を偲ぶ会」を協会主催で企画いたしましたところ、大勢の米山先生ゆかりの方々がお集まりくださいまして、こうやって心から懐かしく米山先生を偲ぶということになりました。大勢お集まりくださいまして、まことにありがとうございます。

私自身は米山先生の学問の分野は、そんなに深くは存じあげませんでした。米山先生がアフリカに行っている調査をなさったということ。また京都の祇園祭、その他のお祭の研究でも第一人者でいらしたことです。それはもうだいぶ前から存じておりましたが、特に米山先生の本で拝読して面白かったのは、さつき上田先生も名前を挙げられました『小盆地宇宙と日本文化』という、あの本でございます。いいところに着眼したと思って「京都に米山俊直あり」ということを、そのとき初めてはつきりと認識したのであります。

私も盆地というのは非常に好きでありますし、盆地が日本列島の中の各地にあつて、それがそれぞれの文化をつくりあげてきた。日本列島の中だけではなくて、外国でもその盆地というものはそれぞれに特有の文明を生みだしてきた。そういうことを、あの本をとおしてうかがうことができたわけであります。

実際に米山俊直先生に私がお目にかかりましたのは、もう二十年前ぐらいからでしょうか。サントリー文化財団というのがありまして、あそこ関係の委員たちが一年に一回、秋にそれぞれ夫婦同行で一泊二日、あるいは二泊三日の旅をする。そこには佐治敬三ご夫妻も一緒に来るという旅行がありまして、米山先生も同文化財団の選考委員をなさっていて、私も一方の選考委員をやっておりましたので、それと一緒に旅行をすることになりました。それで米山先生、それから奥さまの冬志子さまに私の家内も一緒に非常に親しくお付き合いをいただくようになりました。



米山先生はみなさんよくご存じのように、何かどこかひょうひょうとしたところがいつもありました。ここのこの祭壇のお写真が非常によくその風貌を伝えております。なりふり構わないというか、あまり身を飾ったりしないで、髪の毛もいつもきれいなでたりしていいないで、ひょうひょうとして、身体は非常に身軽にひょうひょうと歩くというところがあつて、あの調子でアフリカも歩いてきたのかなと思つて眺めておりました。

お話の調子も、そういう調子で談論風発。あつちに行きこつちに行き、いろいろ面白い話をこちらとうまく合わせてやつてくださる。実に談話が面白い、愉快な先生でありまして、私はその京都学派の一端をそうやつて垣間見ていたわけでありませぬ。

さっきの上田先生のお話によりますと、今西錦司先生をはじめ梅棹忠夫、梅原猛、上田正昭に至るまで、それから桑原武夫先生なんていう方もいらつしやいました。京都学派の人たちは、それぞれいわば一派のオーガナイザーとして優れたメンバーを集め、金を集め、そして行動を起し、その成果を次々に発表してこられた。そういう点で非常に優れた人たちが集まつて、戦後の日本文化の一端をそれですくい上げたわけでありませぬ。

東京ではそういうことはできませんでしたが。京都だからこそのこと。まさに盆地文化の効用の一つであつたかと思ひますが。米山俊直先生も、たしかにそういう面を受け継いでおられたようでありませぬ。

そして、いろいろな研究会を組織したり、最後になつて晩年にこの国際京都学協会というものをつくつた。いわゆる学界だけではなくて、学界の外のいろいろな機関、ビジネスでお仕事をしていらつしやる、京都に深く愛を抱いている方々を鳩合して、京都文明の研究をし、その研究成果に基づいて京都をさらに豊かに美しい都にしていこう。そして、それを世界に向かつて示していこうという、そういう非常に高い志で米山先生も、この今西、梅原、梅棹、上田、桑原の諸先生に続く京都独特のオーガナイザーとして活躍なさりはじめたのでありませぬ。

国際京都学協会がそうやつてつくられました。お金の面では、やはりさっきの上田先生のお話のとおりで、まことに集まりが悪くて、わずか数百万円

のお金でかつかつに借金を背負いながら動いているというのが、さつき協会の財務報告を受けたばかりのところ、そういう状態でありませぬ。

これからはみなさんに、今日ご出席の方々の全員に五万円ぐらいつづでも今日のお帰りにでも寄付をしていただければ、いっぺんに数百万円集まるという、そういうことも夢見るほどに窮乏として動いている協会でありませぬ。

米山先生はこの協会をつくられて、まだ本格的に本筋に入つた研究活動、広報活動ができないでいるうちに、志半ばでにわかにお亡くなりになつてしまいました。まことに残念であります。

私は「病院に入院なさつた。胃癌の手術をなさつた」というようなことを事務局の松田さんから聞いて心配はしておりましたが、まあ、あの米山先生だから、もともとあんまり太つてはいないし、ひょうひょうとしていらつし、またひょうひょうとあらわれるのだからと思つておりましたところを、また再入院、二回目の手術とか、そういうことが度重なつて、あれよあれよという間に、にわかになつてしまつたわけでありませぬ。

米山先生御自身も、まだ思いをたくさんこの世に残して、あの世に渡つていかれてしまいました。その思いを、ぜひ私たちがこれから受け継いで、それを背負つて、いい国際派の京都研究、国際京都学協会の仕事をしていきたいと思つております。

私自身は京都人間ではまつたくありませんし、いまの大学にもいつまでいるともわからない身の上であります。さて、この理事長というのは私自身にとつて、どういうふうにやつていけるか、まことに心もとないところがあつたりますが、みなさんから大いなるご協力をいただいて、この米山先生が考えられた国際京都学協会、この協会名の三語にはそれぞれ意味深長なものがありますが、それを受け継いで、この会を發展させていきたいと思つております。

どうぞ亡くなられた米山俊直先生の志を受け継ぎ、米山先生がこの世に残された思いを果たしてやるというつもりで、これからこの協会の活動に、ぜひみなさんがお力添えを賜りますようお願い申しあげまして、今日のこの会の私からのごあいさつといたします。どうもありがとうございます。

追悼講演 「米山俊直さんと私」

京都大学名誉教授 上田 正昭 氏

みなさんがよくご存じの米山俊直さんが、去る三月九日に残念ながらあの世へ旅立たれました。私が米山さんが亡くなったのを最初に聞いたのは、米山さんの後 京都大学文化人類学の教授をしておられる福井勝義さんから連絡がありました。「米山先生が亡くなられました」と。たいへんびっくりいたしました。そして国際京都学協会の事務局長の松田さんのほうからもお電話があつたわけです。

一昨年の十一月に胃癌で手術をされまして、お元氣になられてたいへんよかつたと思つておつたのですが、まことに残念なことで痛恨の極みです。先日、国際京都学協会の松田事務局長さんから追悼の講演をしてほしいというご依頼がございました。楽しい講演ならいいのですが、親しく交わつた人を偲んで講演をするというのはいへん心が痛み淋しい限りで、言葉にならないことも多いと思いますが、米山さんのご冥福を念じながら四〇分ばかり追悼の話をさせていただきます。

米山さんは多方面で活躍されました。いまから四年前になりますが平成十四年、二〇〇二年五月二十六日に京都の賀茂御祖神社、いわゆる下鴨神社の糺の森で有志相集いまして社叢学会という学会を設立しました。

この学会は聖なる社寺林、神社や寺院の森、あるいは塚の木立、古墳などのいろいろな史跡の樹木、さらに沖繩の御嶽(うたき)、さらに広くアジアの Holy Forest、あるいは wood を保存し活用していくことを環境問題の一貫として、森の国、森林の国日本にふさわしい学会をつくらうのではないかということ、国内はもとよりアメリカのドナルド・キーンさんなども相談してつくりあげた学会です。

その学会の、私が図らずも初代理事長を務めておりますが、米山さんにも発足以来理事になつていただいて、いろいろご協力いただいたわけです。本年の



一月二十八日に関西の定例研究会が開かれて、私もその研究会に出たわけですが、米山さんも来ておられました。

いま全国に、関東には関東の定例研究会、中部には中部の定例研究会がありますが、それぞれの支部が年に六回ぐらい隔月に研究会をおこなっているわけで、本年の第一回の関西の定例研究会が一月二十八日にありました。

米山さんも来ておられて、研究会で質疑応答があつたときも活発に質問しておられましたし、あとで実は五月二十七日、昨日ですが、第五回の研究大会を、福岡に支部ができあがることになりましたので、太宰府市の太宰府天満宮でやるという相談をしておりましたときに、米山さんが「先生、基調講演をする人がいなければ私がやってもいいですよ」というようなことを言っておられたんですね。

今日おみえの山折哲雄さんに実は昨日、福岡の社叢学会の「鎮守の森の伝統と課題」というシンポジウムの基調講演をしていただいたわけですが、米山さんが生きておれば、きっと福岡の大会にも来て、元氣だったら自分が基調講演をしたかったなあと思っていたかもしれないと、昨日の山折先生の講演を聴きながら、米山さんの在りし日を偲んでおりました。

私が最後にお目にかかったのは一月二十八日です。そして、しばらくしましてから二月十四日に手紙が来ました。その手紙には次のように米山さんが書いてあるわけです。

「二月十四日からの再入院の予定を変えて十二日に決定、入院しました。栄養補給一週間の点滴を続けます。その如月の望月のころまでもつかどうかというところですよ」という、たいへん心細い便りがまいりました。

「如月の望月のころまでもつかどうかというところですよ」という、その言葉は「承知の西行法師の最後の歌ですが、「願はくは花の下にて春死なん」。その下の句に託しての便りをいただいて、たいへん心配しておりました。一月二十八日には「基調講演をしますよ」とまで言っていた米山さんが、にわかには状況が悪化したというお便りをいただいたわけです。

私が米山さんと親しくなったのは、もちろん京都大学にいたころなのですけれども、本日は文化人類学関係の先生方もおみえですが、「近衛ロンド」というのがあります、私は「近衛ロンド」の会員ではありませんけれども、今西錦司先生から「一度、上田さんいらつしやい」ということで「近衛ロンド」の会にまいりましたときに、米山さんとお目にかかったのが最初ではないかと思えます。

そして、京都大学の今西先生のもと、京大の人文科学研究所の今西研究班のメンバーになるようにと、今西先生からお誘いを受けて、歴史学から私だけだったようですが、梅棹忠夫さんをはじめ、もうお亡くなりになりましたが中尾佐助さん、今は体調をくずしておられる上山春平さん等々のメンバー、そのなかに米山さんもおられました。この今西研究班の会が私と米山さんが学問的につながりを持つようになった最初でした。いったいいつだったかなあと調べて調べてみましたら、いまから三十九年前、一九六七年四月からです。

お手元にお配りしてある『偲ぶ会のしおり』に米山さんの著作が書いてありますが、有名な著作としては一九八五年の『文化人類学の考え方』。特に一九八九年の『小盆地宇宙と日本文化』、これは名著です。岩波から出版されました。それから一九九〇年の『アフリカ農耕民の世界観』。晩年の著作としては二〇〇二年の『私の比較文明論』など、いろいろございます。

米山さんは今西錦司先生のお弟子さんでもあり、兄弟子に梅棹忠夫さんがおられるわけです。私はその当時京都大学の教養部の歴史学教室に所属しておりました。米山さんが甲南大学の助教授だったのですが、梅棹さんの推薦で京大の文化人類学の助教授として候補者になられたわけです。

当時の京大教養部の教授会は選考委員を選ぶわけですが、その該当学科のものには二名しか選考委員になれないのです。学科だけで人事をやると、とかく派閥人事になる恐れがありますので、他の学科のものを三名選ぶ。

私の学問は文化人類学と直接関係はないのですけれども、柳田国男先生、とりわけ折口信夫先生のご指導を受けたりしておったことなどもあって、選考委員のメンバーの一人に選ばれました。

もう一人有力な候補者がおられて選考は難航しました。選考の会議が終わって家へ帰ってまいりますと、梅棹さんから電話がかかってくるわけです。「上田さん、今日の状況はどうですか」と。

何と申しますか、梅棹スクールとか今西スクールというか、やっぱり学問の仲間の結束というのは非常に強いなあということを改めて実感しました。選考の状況をたいへん心配しておられたのですが、最終的には米山さんが選ばれて、京都大学の初めての文化人類学の助教授として就任していただくことになりました。

今西先生や梅棹さんは京都大学に文化人類学の講座を何としてもつくりたいというお考えをお持ちになっていたことをあとで知りました。これはもう時効になっておりますから申しますが、米山さんの就任が決まったあとで今西錦司先生と梅棹さんが私をある料亭に招待されて、事前だったら具合が悪いですが、念のために申しますが教授会で決まったあとですよ。(笑)そこで今西錦司先生からの「丁寧なお礼のごあいさつをいただいたことを想起します」。

たいへん因縁が深く、今度は教授のプロモーションがあるわけです。結局、私とその選考の委員長になって、教授会で米山さんが文化人類学の教授に適當であるという審査報告を私がいたしましたして、教授になっていただくという。そういう因縁もありました。

したがって米山さんは私には頭が上がりませんね。(笑) 私もいろいろなものを頼みやすいようであって、実際は頼みにくいのです。何か私が恩に着せてものごとを頼むように米山さんが取るといけないので、なかなか頼みにくいのですが、それでもいろいろお願いしたこともあります。

私が京都大学を定年退官するころ、ちょうど米山さんは京都大学の評議員だったのじゃないかと思いますが、京都大学の退官記念の最終講義はもちろん教室が主宰するのですけれども、米山さんも評議員として「あいさつをいただいた記憶がございます。

その後もいろいろな会でのつながりがあります。米山さんは京都大学を定年で退官されてから大手前女子大、のちに女子は消えまして大手前大学になりましたが、その学長時代にも私にいろいろと相談してくるわけです。こちらは、「こういうことを言ったら恩を着せるようになると思っている」と思っているのですが、米山さんは甘えているというか何かと相談してくるわけです。

たとえば、エビスのカミの研究会をやりたいというわけなのです。西宮にはエビス神と関係の深い西宮神社がありますね。「先生、メンバーになってくれないか」と。私は七福神の研究にもたいへん関心がありまして、それはいいですよと言って承知したのですが。

米山さんが大手前の学長をしてもらったときに「たる」という出版社から『行基と渡来人文化』という本が出ていたわけなのです。これは私の専門とも関係があるわけですが、これはその本のなかで米山さんが言われている言葉です。私も加わった座談会での米山さんの発言なのですが、

「新しく大手前大学に社会文化学部という四年制の新学期ができて、私が社会文化論という講義を受け持つことになったのですが、そのなかで大学(伊丹のキャンパス)で、大学のそばに流れている猪名川流域の研究をしようじゃないかと提案したわけです。テーマはそれこそ自然、歴史、文化、社会問題など何でもいい、自分たちの関心のあるテーマを選んで自分たちにしかできない調査を自分たちの足を使って論文にまとめてみようじゃないか」という提案を、その社会文化論の講義のなかで学生諸君に米山さんがするわけです。

そして「猪名川の周辺には古代の人々の暮らしが偲ばれる遺跡や神社仏閣も

非常に多い。また古代朝鮮半島から海を渡って日本にやってきた渡来人たちの足跡もあちこちに残っている。それらを調査しているうちに学生たちも興味があつて、奈良時代この地を中心にして日本の国に名をとどろかした高僧行基という人物に収斂することになったわけです」と言われているのです。

学長として、また社会文化論の講義をする教師として米山さんが中心になられて、これに辻一郎さんがたいへん協力しておられるわけです。今日もおみえかもしれませんが、元毎日放送の報道局長で、のちに大手前大の教授になられた方ですが、放送部の学生諸君と一緒に猪名川流域の渡来文化の映像をおつくりになった。私も相談に乗りましたが。

こういう仕事も米山さんらしいお仕事で、米山さんはアフリカの現地調査にも行っておられますし、都市の人類学、例えば天神祭とか祇園祭とか、いろいろ学生諸君と一緒に調査しておられる。

京都大学の人間・環境学科がしております『人環フォーラム』という季刊の研究誌がありますが、その十四号には京都の三天祭りを取り上げたおり、葵祭は園田稔さん、時代祭は私、祇園祭は米山さんという、この三人がそれぞれ執筆をしているわけですが、米山さんは都市の祭りについてもユニークな研究をしておられました。

そういうこともあつて、この学会のプロローグになるわけですが、芳賀徹さん、富士谷あつ子さんが中心で『京都学を学ぶ人のために』という本をつくることになって、私にはその監修をせよということになったのですが、米山さんにも参加してもらおう。米山さんには祇園御霊会を書いてもらおうといじやないかということで、この『京都学を学ぶ人のために』の祇園御霊会は米山さんが書かれています。そして、この本が母体になりまして、国際京都学協会ができて、その初代理事長に米山さんが就任されるということになるわけです。

この渡来文化研究のメンバーには、今日もおみえになっている東北大学の、いまは専任講師をしておられる、韓国の李仁子(リインジャ)さんも参加しておられる。米山さんのお弟子さんですが、そのおりの座談会に加わってられます。

私の関係で申しますと、関西で一番早く生涯学習都市宣言をしたのは、私の

住んでおります亀岡です。その生涯学習都市構想をまとめる座長を私がしたのですが、そのメンバーのなかにも、今度は私のほうからお願いで米山さんにもメンバーになっていただきました。そうした「縁で、今日の「偲ぶ会」にも亀岡市長さんから花を贈っていただいております。亀岡の生涯学習財団の理事にも米山さんには就任していただいているわけです。

亀岡の生涯学習は、当時の市長谷口義久さんが市政の中心に生涯学習を置かれて、人口約十万人の都市なのですが、なんと約二百億円で生涯学習センターをつくられたのです。

私が提案したのは二億円なのです。百倍ですね。仏つくって魂入れずということになるんじゃないかと思っております。もう年間五十万人を超える利用者があつて、いまでは早く予約しないと会場が取れない状況です。この施設はガレリアかめおかというのですが、今日はその事務局長さんもおみえになっています。

この生涯学習の亀岡には三大講座というシンボル講座がございます。一つが「コレージュ・ド・カメオカ」という講座です。そうそうたる先生方に講演に毎回来ていただいている。

第一回はノーベル賞を受賞されたばかりの福井謙一先生に来ていただき、私を中心になって頼んで来たのですが、松本清張さん、大江健三郎さんほか日本を代表する方々に出講していただいて現在にいたっています。京大の総長先生には順番に、来ていただきました。西島先生、長尾先生にも井村先生にも来ていただいたりして。

この「コレージュ・ド・カメオカ」のネーミングは米山さんの提案です。ご承知のように二五四〇年にフランス王室がパリの市民のために「コレージュ・ド・フランス」という講座を開いたのです。これは現在もつづいております。いまから三年前には「コレージュ・ド・フランス」でも私も懇談したことがあります。ですが、そのネーミングを提案したのは米山さんなのです。

ただし、米山さんは決して無駄にはしていません。小宇宙盆地論の構想には、京都や遠野だけではない、亀岡盆地もちゃんと視野に入れ、亀岡も彼のフィールドの一つになっているわけです。

米山さんという方はたいへん気さくな、そして気の優しい人で、嫌なことは嫌だとはつきり言えはいいのですが、なかなか断ることができないというところもある。しかし芯はなかなか強い方でした。

社叢学会という学会では、今度福岡に支部ができましたから、関東、中部それから関西、九州というふうにはひろがっています。やがて沖縄にも支部ができるでしょう。会員が六五〇名ばかりおりますけれども、この学会の理事のひとりとして米山さんにもご協力いただきました。

昨年は愛知万博がありまして、愛知万博は地球博なのです。社叢学会は地球の環境問題のためにも立ち上がったんじゃないか、出展しようということになりました。予定どおりやると八千万円いる。実は九千万円いったのです。

結局出展することになった。愛知万博においてになった方は、シンボルタワーが二本大きなのがあったのに気づかれたと思います。あの上には天空鎮守の森というのをつくっているわけです。それから長久手のゲートへお入りになった左手に、ざあつと樹木が植わっている千年の森、あれも社叢学会がつくっているわけなのです。その寄付集めに私も苦労しました。

そうした愛知万博との関連もあつて、第四回の去年の総会は愛知県の一宮市で実施したのです。そして、フランスの社会科学院の教授ですが、オーギュスタン・ベルグ先生にも来ていただいてシンポジウムをやりました。そのシンポジウムの最後の総括を米山さんにもしてもらいました。

『社叢学会研究』四号に掲載されていますが、その総括のなかで米山さんは率直に自分の考えを述べて、かなり長い総括をしておられるのですが、その一部だけを申し上げます。

「上田正昭先生がご指摘になっていたことですが、いままの天皇の祖先の桓武天皇のお母さんは高野新笠（たかののにいがき）といって、朝鮮出身の人です」と述べられています。これは一九六五年に、いまから四十一年前に中央公論社から『帰化人』という本を出しまして指摘したことを指します。当時は、「帰化人の遺跡」などと歴史学者や考古学者はみんな言っておったのですけれども、古代にもちゃんと法律がありまして、「大宝令」「養老令」にも「帰化」という用語があつて、「帰化」というのは籍貫に付すと。籍というのは戸

籍です。貫というのは本貫です。外国から来た人が本拠を定め戸籍に登録する。これを帰化の条件にしているわけです。

統一国家がない段階に帰化人がいるはずがないのです。弥生時代に朝鮮の遺跡ができた。すると帰化人の遺跡という。私どもの先輩はみなそのように言っていたわけですが、私は、これはおかしいんじゃないかと。

帰化した人を帰化人ということは差別でも何でもない私は思っておりませんけれども、帰化していない人を帰化人というのはおかしいんじゃないかということ、で、「帰化」という言葉の意味と「渡来」という言葉の意味をまず冒頭に書いたのです。

「渡来」という言葉は上田がつくった用語であるという人もいましたが、それは不勉強であって、『古事記』には「帰化」という用語はどこにもありません。すべて「渡来」です。『風土記』にも「帰化」という用語はどこにもない。すべて「渡来」です。あるいは「参渡来」、参り渡り来つ、あるいは渡り来つと書いているわけです。

「帰化」という用語を使っている古い例は『日本書紀』です。『日本書紀』は十二例使っています。中国からもいろいろの人が来ていますが、中国人には使っていないのです。朝鮮半島から渡ってきた人、あるいは屋久島からきた人、そういう人たちに使っているのです。

言うなら日本版中華思想の産物なのですが、そういうことから書き始めまして、東大寺大仏建立の立役者は日本名・国中公麻呂という人です。西暦六六〇年に百済から亡命してきた国骨富という百済の人、そのお孫さんが日本名・国中公麻呂という人で、大仏建立の技術者の中心人物なのです。

現在の東大寺大仏は、ご承知のとおり元禄五年の三度目の造立でして、天平のものは蓮弁の毛彫り二葉だけです。国中公麻呂の作品として現在残っているのは三月堂（法華堂）の不空羂索観音です。あの国玉の不空羂索観音は紛れもなく国中公麻呂の作品として、こんにち私どもも見る事ができる。そういうことも書きました。

そうして桓武天皇のお母さまは高野新笠という方であって、その祖先は紛れもなく百済武寧王の流れをくんでいるということを書いたことを、米山さんが

ちよつと触れられているわけです。

それをいまの天皇が、サッカーワールドカップが二〇〇二年におこなわれましたが、その前年二〇〇一年の十二月の誕生日の前の記者会見で、「韓国と日本の皇室はたいへん深いゆかりがある」と。そして『続日本紀』には桓武天皇の母が百済の王族の出身であるということが書いてある」という有名な発言をされることになるわけですが、そのいわれについても詳しく書いたわけですが。

「というような話をみんながだんだん知っていく必要があります。それを知っていくことによって日本の国の体質が変わっていくと思うのです。サッカーに勝ったから「日本、日本」とうれしがっているナショナルリズムはまだいいけれども、いわゆるウルトラナショナルリズムといいますが、ああいうふうな風潮が広がるといことは、私など平和な日本で生きていて、それがあたりまえだと思っている人間にとつては非常に恐ろしい感じがするわけです。このあたりを何とか克服していく。そのためには鎮守の森、神社というものの尊さというものが意味を持つのではないかと思えます」という言葉で、総括を締めにくくっておられました。

この総括にはもつときびしい言葉もあるのですが、差し障りがありますので、それは省略します。

私が見たいへん信頼し心の友としておりました米山さんが残念ながら亡くなつてしまつたわけですけれども、京都学協会の顧問もしておりますが、承りますと「国際」というネーミングを付ける必要があるということ強く米山さんは言われたようです。

学会というよりは協会というようにして幅広く、学者だけではなくて多くの京都学に関心のあるみなさんに参加していただいて、国際的視野から取り組もうと米山さんが提起されました。みなさんとともに「冥福を祈り、その米山さんの志を受け継いでまいりたいと思ひます。私自身余命幾ばくもないと思ひますが、命ある限り頑張つてまいりたいと思ひます。

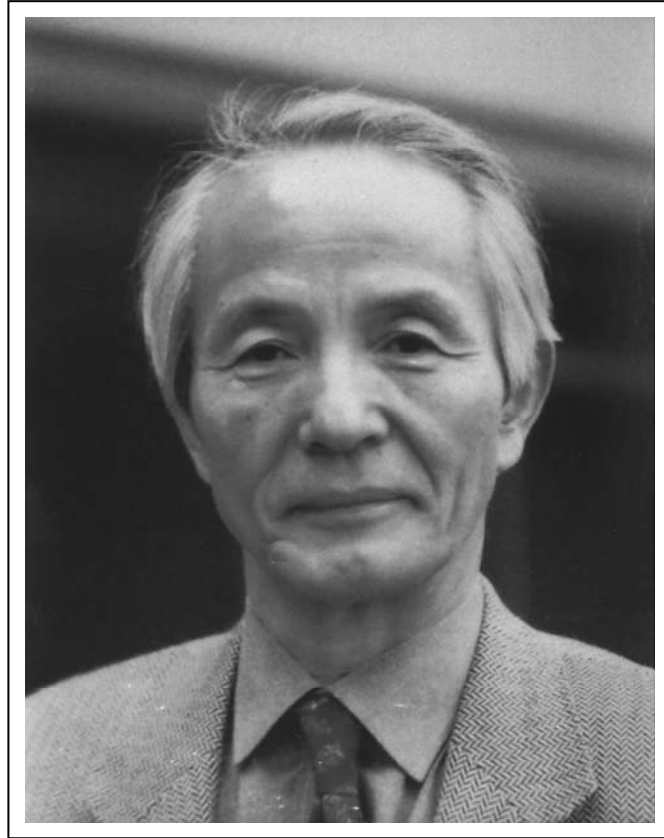
ご静聴ありがとうございます。

日本文明の基礎にある京文化

——国際京都学協会のねらうもの——

『第一回国際京都学体系研究会（二〇〇五年十月十五日（土））の講演のテープを起したものです。』

故 米山 俊直 先生



〈国際京都学の目標と課題〉

「国際京都学」というのを、もう始めまして足かけ三年やっています。どういふふうにやっていくかということ、初めはちよつとつまずいたと言うか、おたおたしたものですから、「国際京都学」とは何かということ、議論する研究会を続けてやりましょうと計画していました。私が病氣した

り何かして、私が元氣になったら、途端に井上満郎さんがまた病氣したりしてということ、計画がおくれてしまい、いま始めたところ、

要するに国際京都学というのは何かということなのですが、なかなか議論百出になると思います。取りあえずは、上田正昭先生の監修で、芳賀徹さんと富士谷あつ子さん、つまり私どもの副理事長（当時）のお二人を編者にした『京都学を学ぶ人のために』を、その代理だと理屈を付けていました。要するに「京都学」というのは、地域を元にした地域研究、地域学であるということは間違いないのですけれども、京都は非常に特殊な地域でございます、ほかの地域学とちよつと違った問題をいくつか抱えていると思うのです。

そのいくつかの理由をここに個条書きにしてみます。

一番目は、完全にアーティフィシャルにつくられた都市。これは、この都市でも同じことですから、人工的に計画された首都であるということ。

それから、千二百年にわたる歴史の長さとか古さというのを抱えている。これも非常に長いわけですね。千二百年なんていうと、もう気が遠くなるようなふうにいる人も、新興独立国なんかのあいだにはあり得ると思います。逆に、うちはもつと古いんだというふうには頑張る、イラクなんかはそのほうだと思いますが、そういう人もいるかもしれませんが、そういう歴史の長さがあるわけです。それが二番目。

三番目は、国際性ということがあるわけです。これから何度も出てきますけれども、そもそも建設にあたって朝鮮半島からやって来た秦氏と呼ばれる一族が頑張ったというようなことも伝わっているわけです、そういうものがあるわけです。

四番目は、伝統産業の蓄積というものが、いろいろな意味で非常に大きな要素をなしている。まあ、負担にもなっている面もあるわけですが、しかし伝統産業が存在したおかげで京都は成り立っているのだと。京都は立派な産業都市であるという言い方もあり得るわけです。

五番目は、宗教都市としての特殊性というのがあります。これは、本山

がたくさんあるということと、家元制の家元にあたるものがいくつも、つまり千さんをはじめとして、池坊さんとか、たくさんのお家元が存在しているということも、宗教都市との関連で言いますと、非常に古いということとを証明しているというふうに言えると思います。

そういうところですので、非常に特殊な都市である。それを研究してみようというのが「京都学」、私たちの言っている「国際京都学」の前提だと考えていいかと思えます。

「国際京都学」の目標と課題ということを考えているのですが、あまりここで肩が凝るようなことを考えてもしかたがないので、『国際京都学を学ぶ人のために』が将来できるのだということにして、研究会を続けて、そのあいだに、二年くらいかかったら一冊の本ができるかなと考えているわけです。

今日ご参加いただいたみなさんからも、ぜひご報告をいただくといいかなかたちで、それを蓄積していくというようなかたちで、「国際京都学」の資産を蓄積するということをやっていきたいと考えております。

二番目は、初めから京の水ということを目指して、あるいは鴨川ということをキーワードにしたかたちで、これまでの研究会をずっと続けてきているわけです。森谷尅久さんなんかが中心になった歴史のある京都の水の話、それから自然環境としての水の話志明院の田中真澄さんが中心になって、石田紀郎さんとか、いろいろな自然科学の方のお話をいただいたりしてきているわけなのですが、できればそれをつないで鴨川博物館と、仮称ですけども、要するに京都の水を代表するようなシンボリックな博物館というものをつくりたいなという長期計画を持っています。

これは、具体的にいまどういうふうにしていますという話ではないのですが、いくつかのスポンサーも探して、そういうようなものをつくることを考えているわけです。

三番目には、いまやっていることでは、富田屋さんが中心になりました、第三水曜日の日に富田屋さんのクラブハウスのところで集まって、そこで会員交流会というようなかたちで親睦を図っていくということをやっています。

おります。これにもみなさんご参加いただいていますから、ぼつぼつそのようなかたちで、いま活動を始めたというふうにご考えていただけたらいいかと思えます。

そんなことで、京都学、あまり堅苦しく考えないで、気楽にゆったり、のんびり、スローにやっつけていこうと考えております。初めはちよつと意気込んで、大量の募金活動、キャンペーンをやって、それで思っていたのですが、そのような時代でもありませんから、もう少し地道にやっつけていこうがいいかなと考えています。私自身の体調の問題もござりまするので、そういうふうにご考えている状態であります。

それで、京都文化、都の字を入れない京文化にしましたが、日本文明の基礎としての京文化の話を、これから考えていきたいと思っているわけです。

ご案内のように、京都の三大祭りと言われる葵祭、祇園祭、時代祭というようなものがありますし、その裏番組のような、例えば鞍馬の火祭は、時代祭と裏表になっているような感じがあるわけですし、いろいろな意味でそういう祭事が京都にはあります。

これも繰り返すことは必要はないと思いますが、歴史の重層性のなかで京文化というのがつくられてきていると。これは本当にびっくりするほど密度が高い。時代を見ますと、非常に古い文化からつい最近のことまでが同じ場所で、同じ視点で蓄積されているということが、京都文化の特徴と言っていると思います。

現在は、その新旧の祭祀行事のようものが混ざり合って、それが絶えずある意味で変動しております。

私は祇園祭の調査を一九七三年から始めて三年間、一九八三年から始めて三年間、それから一九九三年というふうには、三度にわたって三サイクル、フィールドワークをやった経験があるのですが、明らかにその二〇年のあいだでも非常に大きな変動が、祇園祭一つを取り上げても言うことができます。ですから、これは当然のことですが、人が亡くなり、新しい人がそれを担当しというようなことが、その背景になっているのだらうと

思います。

〈京都盆地〉

京都の特徴は、もう言うまでもなく、三山二川と呼ばれている鴨川、桂川と、それから東山、北山、西山という三つの山並みと、そのなかでできあがっている京都盆地であります。

ここでちよつと脱線しますが、京都盆地を中心にしてお話ししていきますけれども、京都と言うときには、京都府下全体を念頭に置かなければいけない側面がいろいろございます。ですから、それも含めて、京都という言葉を使っていきたいと思いますが、取りあえずのところは京都盆地、山城盆地を中心にして考えていきたいと思っております。

日本列島のなかで、このあたりは、本当に東日本と西日本をつなぐ結節地点であります。これは、自然環境についてもそう言えると思えますし、それから植生、植物の分布などにしても、京都の北山のあたりがいろいろなゾーンのトランジション、推移帯であるということがわかるわけです。鴨川、桂川も抱えたかたちで二つの流域を一つにして、さらにそれが淀川になっていくという地形であります。

盆地は、昔は山背盆地と申していたわけですが、山城盆地とも呼ばれておりまして、それがあある意味で、内陸的な気候で、夏が暑く、冬が底冷えするというのは非常に有名になっていくわけです。

風水説というのがありますが、風水説にもかなうというふうにも言われているわけです。つまり、三方が山に囲まれて、そこから川が流れ出ているという、そういう地形のことを、風水にかなうという言い方があります。その例でもあると言われているわけです。

別の見方をしますと、日本文明というのは、北九州というのと、それから畿内という、二つの焦点がありまして、それが中心になったかたちで楕円が形成されていたわけです。

ところが、それが時代がたつにつれて東に移りまして、北九州はちよつと没落して、東に鎌倉幕府、それから関ヶ原の戦いのあとの江戸幕府とい

うことで、焦点が移行します。私は二焦点の東漸説というふうに言っているのですが、そういうかたちで移動しまして、その東の焦点がいまほとんど大きく肥大化しまして、一極集中現象が見られる。ちよつとしやくに障りますが、そういうことが起きているというわけでございます。

〈政治都市・宗教都市・商業都市〉

林屋辰三郎先生によれば、京の廃絶の危機というのは三度あったという話なのです。一つは源平合戦、治承四年（一一八〇）から文治元年（一一八五）の源氏と平家の争いということで、危機存亡の時を迎えて、本當に福原に遷都されてしまうという危険もあつたわけですね。

二つ目は、応仁の乱以後の文明九年までの、一四六七年から一四七七年までの十年間の大混乱でありまして、このとき西陣という名前も生れますし、そのなかで商業都市に変質していく。

一番の源平合戦のあとは、政治的な都市から宗教的な都市に変質した。それからさらに応仁の乱で、商業都市に変質したというふうにも考えられるわけです。

三番目の危機というのは、言うまでもなく東京遷都でありまして、東京に天皇が行ってしまったって、あと一種のエンブティな状態に、政治の中心でもないし、商業の中心でもないしという状態であつたのですが、それを中央政権も気にしまして、いろいろな施策をとって、結局、いろいろな意味で日本の先進的な都市としての再出発が実現してきているわけです。

王都という言い方がありますけれども、王都としての京というのは、七一〇年の平城京、七八四年の長岡京に続いて、鳴くよウグイス平安京で、七九四年から平安京になっているわけですが、そのあともいくつかの、先ほど言いました源平合戦のときには清盛が、福原に都を移そうというふうな戦もありました。頼朝が実際に鎌倉幕府をつくってしましますので、政治は分裂状態に、分裂と言いますか、実権は鎌倉に移るといふふうな状態が起こっているわけですね。

ところが、いろいろないきさつの結果、足利尊氏による室町幕府が京都

に幕府を移しましたので、そこでまた一種の王都性を身に付けることになった。

それから江戸幕府になりますが、江戸幕府は明らかに政治都市としての江戸と、宗教、あるいは儀礼の都市としての京都というのを分ける契機になったというふうに言っていると思います。

話題をどんどん拾い上げていくわけですが、渡来人の果たした役割というのは、これはばかにならないと言いますか、非常に大事なものであるということがわかります。

平安京建設には、先ほど言いましたように、秦氏をはじめとする渡来人の貢献が大きかった。松尾大社は秦氏の都理（とり）のつくったものですし、伏見稲荷大社も秦氏の創めたものです。

また秦河勝は、広隆寺の弥勒菩薩を聖徳太子からいただいたということがあります。秦朝元の娘の子、藤原種継は、長岡京の造宮長官でありますし、その暗殺事件のあと、平安京建設を推進した藤原小黒麻呂、その子の葛野麻呂は、全部秦氏の一族の血を引いているのであります。

この人たちは、また大堰川（桂川）の治水にも非常に大きな貢献をしている。このあたりの干拓、開拓、開田というものは、すべて秦氏の貢献が大きいと言っているのだらうと思います。葛野大路というのも、その一つの象徴という言い方ができるかもしれません。

高麗氏というのが八坂神社を祀って、あそこに法観寺というお寺、八坂寺をつくっているというふうなこともあります。

それから、これは現天皇もどこかでおっしゃって、話題になっておりましたけれども、桓武天皇のお母さん高野新笠というのは、百済系の一族のお一人で、それがいま平野神社に、高野新笠が勧請したご先祖が祀られているということになっております。

現在の枚方市には、百済の王さまの滅亡のあとの末裔が集まって住んでいたらしくて、桓武天皇がここで郊祀（こうし）、つまり郊外での大きなお祭りですが、そういうことを営んでいるという記録もございます。このあたりのことは、また井上先生あたりが詳しくご説明いただくのがいいかと

思いますので、私は、これは情報としてお耳に入れておきたいと思うわけです。

〈京都の都市改造〉

現在の千本通が朱雀大路というわけですが、これが非常に道幅が狭くなってしまっていて、いまはもう見る影もありませんからね、この千本通というのは、ここがかつての中心軸であって、そこから東側（左京）を洛陽城、西側（右京）を長安城というふうに、洛陽と長安というふうに呼んだりしたというわけです。

ところが、中世以降、右京のほうが衰退して、水田化して、現在の京都市街は、元の左京からさらに鴨川の右岸の、東山連峰の山麓に比重を移していきまして、御所も平安京の計画では、東北の端にあたる場所にあるわけです。

繰り返して洪水に見舞われたことが一つの原因であろうと言われておりまして、十世紀から十二世紀に河床が、川底を上昇させて氾濫原をつくって、河原が形成されたと言われています。

これを大改造したのは秀吉でありまして、秀吉のお土居、これは、京都そのものを城にしようという計画したというふうにも言われていますけれども、防災の対策でもあったということになると思います。

秀吉の都市改造は、京都を城塞化のためのお土居の建造をやりまして、一五九一年から大規模な町割り、区画整備をやりました。一方で聚楽第をつくりまして、方広寺の大仏さんをつくるし、寺町をつくるし、釜座、柳の廊などの遊郭をつくったり、そういうふうないろんな町組をつくり上げていくわけです。

これがずっと温存されてきて、基本的には、明治以降の疏水による発電、市街電車の敷設、東海道線、京都駅による烏丸通の南北分断まで、基本的に大きな変化がなかったと言われております。ですから、秀吉さんというのは、京都にとってはばかにならないというか、重要な存在だと言えるかもしれません。

話題をどんどん飛ばしていきますが、宗教都市としての発展は、初めは、平安京の内部というのには宗教施設がなかったのです。貞観五年の神皇苑での御霊会、これが始まりのようなもので、それから一遍が七条通で時宗の道場をつくったのが施設の始めと言われています。道長の法成寺が築かれ、さらに白河天皇が法勝寺を建設します。それから尊勝寺、最勝寺、円勝寺。延べるという字の延勝寺と、待賢門院の円勝寺というような六勝寺がつくられて、洛外の貴族の別荘がお寺になったりしているわけです。

宇治の平等院が一〇五二年、平安末期の末法思想の表現としてつくられました。普請の量で言いますと、これはたしか森谷さんの発言だったと思えますが、秀吉が一番多くて、方広寺の大仏殿、聚楽第、御所、淀城、伏見城、大坂城など、大坂城は大阪にあるわけですが、こういう大建築をやったのは、秀吉であると。

院政期も、ある意味で三十三間堂や法勝寺の八十メートルの九重の大きな塔などがつくられているわけです。これは建築の話ばかりですけれども、宗教都市として非常に大きく展開してきたということが言えるわけです。

これは、吉田光邦さんの発言なのですが、『文化複合体としての京都』という吉田さんと森谷さんとの編による本がありまして、そのなかで吉田さんは、劍鋒を紹介して、二百本がいまも朝野によって維持されていると言っている、この神祀りが中国の思想である、礼によって成り立っていたということとを主張しています。

中国の思想が御所の紫宸殿をはじめとして、道教の名を冠した殿舎、山紫水明、山河襟帯などの自然の形容などにも中国的な秩序を枠付ける礼の思想があったと。礼を守ることこそ都市生活を成立させる方法だったというのであります。

要するに都市は、山川草木も含めてすべて人工的なものであります。最大限の受容を享受するために、最小限の規律を求めるのが、都市の人間関係では不可欠の条件であります。その枠組みに中国の思想と礼を挙げたのは、吉田さんのある意味でユニークな発想だというふうに言えるかも知れません。

ただ、都市的な付き合い方ということでは、そういう名目主義と言いますかね、建前主義で、本音はどうであつても、建前を重視して行動するというのが礼の基準でありますから、それでしか都市生活はできないのだというゲゼルシャフト的な考え方の基本を、こういうふうに主張されたのだろうと思います。

〈京もの〉

次に、「京もの」という言葉がござりますが、これは林屋さんの文章を高取正男さんが『京女』という本に書かれたもので引用しているのですが、私が、京女と言われて、東男というほかにすぐに連想するのは、やはり京の文字を冠したさまざまな名辞である。もともと古いものは、桃山時代に始まった京焼と呼ばれる陶器群だが、そのほかに京言葉、京紅、京おしろい、京呉服、京料理など、京の名を冠した生活風俗が数多く出現するというのが、林屋さんの文章です。

それは、十八世紀の明和、安永のころと見ているのですが、花の田舎に二百年前の伝統を生かして、観光都市として再生する動きがある。相次ぐ『名所図会』の刊行、各社寺の大遠忌や開帳の行事、遷都千年の伝統の復興が、寛政大内裏の建設を中心に取り込まれるのである。そして、このような観光は、国の光を見るという意味での観光なのですが、現在考えられているような企業からの営利的開発につながるものではなく、国の光を鑑賞するという原義で、元の義で、文化の保存のために役立てられたのであるという言葉があります。

京ものについては、日商社というのがありますが、その村上さんという方が中心になって、京もの研究会というのをいたしました。そのころからお付き合いいただいている方もたくさんいらっしゃるのですが。

具体的なプロジェクトとしては、何をするかという話をいろいろアイデアを出したのですが、最大の目玉は、ミシランにあたるようなものをつくらうではないか。要するにミシランのランキングですね、レストラン、これは一ツ星、これは二ツ星と、星印で挙げていくということを計画して

くれないかというような話がありまして、それが懸案の問題になった。

しかし、それは行政はできないのですね。行政がそれをやると、ハチの巣をつついたような話になってしまって、取り合いになりますし、それから袖の下、どうだこうだという話にもなりますから、それでできなかったのですね。その影武者として日商社に相談があったらしいのですが、なかなかうまくいなくて、そのままになっております。

ただ、土産物としての京ものというのは、いまいくつか挙げました、林屋さんが触れられたものに付け加えてたくさんのものがございます。これもいちいち挙げていたらきりがないのであれですが、ちよつと挙げただけでこれだけあります。

京扇子、清水焼、象眼、竹細工、西陣織、友禅染、京人形、かんざし、しば漬け、千枚漬け、すぐき、木の芽あえ、湯葉、宇治茶、七味唐辛子、昆布、京菓子、五色豆、八つ橋、雲龍、ゆず餅、御池せんべい、祇園ちご餅、紫野、野菜せんべい、ようかん、水紙、京のよすがなど。

それから、京野菜のほうは、林義雄さんという方の『京の野菜記』というのにかなり詳しく挙げておられますが、すぐき、たけのこ、聖護院大根、七条せり、堀川ごぼう、九条ねぎ、水菜、壬生菜、桃山大根、中堂寺大根、京なす、山城なす、賀茂なす、鹿ヶ谷かぼちゃ、桂うり、くわい、聖護院かぶ、聖護院きゅうり、えびいも、田中とうがらし、辛み大根、青み大根、うぐいす菜、桃山みょうが、東寺のまくわ、浮菜かぶ、郡大根などが挙げられています。

林屋先生の、先ほどから何度か引用しているのは、『京都文化の座標』という本なのですが、これは非常にある意味で林屋先生が、京都に対する愛着の表現として書かれた、なかなかいい本だと思いますが、そのなかに、京都の文化の五つの系譜ということが挙げられています。

この系譜が、全部消えてしまわないで、いまでも残っているというところが特徴のわけです。A、B、C、D、Eとありますが、渡来文化、よそから来た文化ですね。それから王朝文化、これは『源氏物語』に代表されるようなものです。社寺文化、それから町衆文化、それから花の田舎の伝統

文化ですね。そのようなものが五つ、ある程度詳しく紹介されています。

京都文化の内容的な特徴としては、これはそれぞれ特徴として性格を挙げておられるのが、美術性、意匠性、デザインですね、宗教性、流通性、伝統性。この五つが、京都文化の座標として考えなければいけないことだというふうにおっしゃっているわけです。

ついでに京都料理の話ですが、京で味わうべきものということで、京料理のリストというのは、いろいろと細かくやりだすときりがないのですが、京で味わうべきものとして。弁当、精進料理、普茶料理、朝がゆ、たけのこ料理、鱧料理、松茸料理、有職料理、和風、中華、懐石風洋食、湯豆腐、飛龍頭、お揚げ、生湯葉、生麩、お雑煮、ひとくち椎茸、ほうじ茶、千枚漬け、すぐき、しば漬け、菜の花漬け、丹波黒豆、いもぼう、八幡巻き、甘鯛、鱧の落とし、鯖ずし、鮎の塩焼き、鰻の茶漬け、しゃぶしゃぶ、牡丹鍋、スッポン、かぶら蒸し、にしんそば、鍋焼きうどん。

名前だけ聞いていてよだれがわいてくるようなものもございます。

〈京都の魔界〉

ちよつと脱線に近くなるのですが、私は『魔界都市京都』だったかな、何とかというのに書かされたことがあって、京都は魔界かなということも考えたのですが、自然に対する脅威として、都市生活のなかでも洪水がありますし、落雷がありますし、それから一番怖かったのは疫病ですね、流行病の脅威というのがありました。

それが貞観五年の神泉苑での御霊会になる。つまり御霊の祟りのおかげで、それを慰めないと疫病の流行が収まらないというようなことがあったりなんかしてというのが、一つですね。

その次は、右大臣から大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷された菅原道真の怨霊が、さまざまに祟って、北野天神として祀られたというようなことも知られています。

そのほかにも八所御霊といいますが、上御霊、下御霊の両社が、崇道天皇をはじめ政争に負けた、政治の闘争のなかで敗れた人たちを怨霊神とし

て祀っているもので、天然自然の恐怖による魔界がそこにあるようであり
ます。

また同じように、対照的に安倍晴明の陰陽道とか、空海による真言密教
のさまざまな霊性、スピリチュアリティというようなものが、京都につ
いては多く説かれています。

私が病気になったと聞いて、私の学生だった人が安倍晴明神社へ行って、
急いで星マークのお札を買ってきて、「先生、これを張っておきなさい」と
言った。張ってあるのですけれども、ちゃんと立派な大学の先生がそうい
うことをしてくれるから、びっくりするのですが。とにかく晴明神社へも
お参りしましたけれども、そういうことが現実の世界にはまだ生きている
というかな、ある意味で生きているわけですね。

ここに一種のリストがありますが、高野澄さんの『歴史読本特集 魔界
都市京都』という本に挙げてあった魔界の例でございませぬ。

一条戻橋。これは有名な話で、このそばに安倍晴明がいて、式神を使っ
ていろいろマジックをやったという話です。

神泉苑、これは言うまでもなく、貞観五年の茅のお祭りの話から始まり
まして、いま現在の神泉苑というのは、二条城の建設のために半分以下に
なってしまったのです。北半分は完全に二条城のなかに取り込まれてし
まっていますから、現在の神泉苑は南半分にすぎないのですが、神泉苑。
それから、珍皇寺ですね。これもいきさつはいろいろあるのですが、省略
します。

鳥辺山。これはお墓ですね。羅城門、これも九条のご存じの羅城門です。
それから、将軍塚、愛宕山、御霊社、蓮台野。蓮台野や化野は鳥辺山と。へ
アになっている墓地ですね。鞍馬山、太秦、大内裏、比叡山、化野、吉田
山、志明院、岩倉、逢坂山、貴船、土蜘蛛塚というのが、高野さんが挙げ
ている京都の魔界と言いましょか、具体的な例なのです。

太秦というのは、どこが魔界なのだろうと思っただけですが、私は太
秦に住んでいますので、ちよつと気になるのだけでも。そういうのがご
ざいます。

〈フェスとの比較〉

ここから遊び半分のようなことになりませんが、ちよつと変わった話をし
たいと思います。京都と日本の京都と、モロッコのフェスというまちを比
較すると、非常に似た部分があるのです。それを私はフェスを調査した
結論というか、その対比のために、京都とフェスを比較いたしました。そ
の比較のモデルというものに、大型有蹄(ゆうてい)類で四不像という不
思議な獣がいます。

私は、梅棹忠夫さんと二人で民族学者訪中団ということで北京へ行きまし
たときに、ほかの何かイベントがあつたのに、それを抜けて、サボって、
二人で動物園に行きました、四不像を見に行きました。

四不像はどういうものかといったら、蹄はウシに似てウシではない、頭
はウマに似てウマではない。角はシカに似てシカにあらず。体はロバに似
てロバにあらずという不思議な容姿なのです。たしかにロバくらいの大き
さの、要するに有蹄類であることは間違いないのですが、そういう変な動
物、現存している動物なのです。

それとそっくりだというのは、日本は、アジアにおいてアジアにあらずと
いうところがあるわけでしょう。アジアには違いないけれど、アジアでな
い面もある。西洋みたいな面もあるけれど、西洋にあらず。モンゴロイ
ドと言っているけれども、モンゴル人ではない。仏教徒だと言っているけ
れど、仏教ではない。神道もあるし、いろいろある。だから、アジアにい
てアジアにあらず、西洋において西洋にあらず、モンゴルにおいてモンゴルに
あらず、仏教徒において仏教にあらずというのが、日本人なのです。京都
はまさにそういうことです。

モロッコは、まったく同じ、似ていまして、アフリカなのですけれども、
アフリカの一番北の端っこですから、アフリカにありて、アフリカにあら
ずなのです。白アフリカというふうな、変な言い方があるくらいです。ブ
ラックアフリカに対して、サハラ以北のアフリカというのがあつたわけでは
ない。

それから、ヨーロッパにおいて、ヨーロッパにあらず。生活様式などを見てみますと、かなり長いあいだフランスが占領してましたので、フランス的な要素がありますし、フランス語をしゃべるし、フランスの教育を受けています。私の知っている人は、『コーラン』をフランス語で教えてもらったと。そういう人がフェスにはいました。

アラブ人にして、アラブ人にあらず。それからそういう意味で、回教徒、ムスリムにして、ムスリムにあらずというところがあるわけです。京都とフェスは、このように非常に似ているところがあるのです。

どういふふうなところが似ているかというのは、ここは日本とモロッコの比較ですね。今度は京都とモロッコのフェスの比較です。これは八つほど挙げてみます。

一つは、歴史の長さがほぼ同じなのです。こちらは鳴くよウグイス平安京なのですが、フェスは、七九二年に計画されて、そこで計画したムーレイ・イドリス二世という人が暗殺されるのです。そしてその息子が実際に建設を開始するのが八二八年のはずです。つまり七九四年とそんなに違わないところに都市が建設されているところがあります。

両方とも、現在も向こうにもパレスがありますし、こちらにも御所があります。

また両方とも交通の要衝に位置している。これも非常に大きな要素だと思います。京都は、東西の交通と南北の交通の軸、クロスするところの軸上にあると考えていいと思います。フェスの場合も、ジブラルタル海峡を越えて直線に降りてきたところの、ずっとどんだん南へ行きますとサハラ砂漠にぶつかって、サハラを越えてサハラ貿易が展開するわけですが、その南北軸と、カサブランカあたりから始まって、ずっと東へ、さらにずっといまのリビアからエジプトにつながる東西軸の、ちょうどクロスする地点にあるのです。非常に場所として商業的な意味で、流通の拠点としての意味が大きいというところがあるわけです。その意味では、日本の京都とモロッコのフェスは非常に似ていると思うわけです。

それから、商業機能が集中しているということが、これは大きいですね。

もう商売人ばかりというか、商人が多い。これは京都の場合も室町がありますから、そういうふうなことがある。

それがスポンサーになりました、伝統工芸を育てております。織物があります。染色、染め物があります。それから、皮革製品、これは向こうはスリッポンというか、かかとのないスリッパみたいな履物があります。皮のそういうものもつくってありますし、さまざまな皮革のマットとか、いろいろなものをつくっています。

伝統衣装、それからこれはカフタンとか、ジュラバとかいうような衣装ですが、そういうもの、それから、陶器ですね。これはまさにフェス焼というのがありまして、水色、紺というか、藍色が主流なのですが、そういう焼き物がございます。こちらは言うまでもない京焼です。

貴金属加工。これもたくさんジュエリーが、偽物も含めていろいろな貴金属加工がありまして、細工物も盛んです。木工品もいすや机、そういうようなものも非常に発達しております。宝飾品もジュエリーもたくさんあります。これは、京都とそっくりなのです。そういう意味で言いますと、本当によく似ている。したがって、そういう人たち、その職人が、本当に零細手工業と言いますか、日本とちよつと違うのは、子どもたちが働かされているのです。家内労働のような状態で、革細工の糸をかがったりというようなことを一日中やっているというところがあります。そういうところが非常に似ているという。

それから、貧富の差が大きい。これも京都とモロッコ、フェスと比較しても非常に似ております。京都の場合も大金持ちもいれば、貧乏人がたくさんいるというのも一つですし、すなわち階層性が非常に明確である。それが意味で共存、住み分けと言いましようか、両方住んでいるということですね。

六番目は教育の伝統があるのです。これは、よくコーラン学校といって、このごろテロの温床だといって、イラクあたりで攻撃対象になっていきますが、マドラーサとか言われているコーラン学校ですね、これがたくさんあります。それが、本当の子どものときから『コーラン』を暗記させるとい

うかたちで教育を与えているわけですね。単純な読み書きそろばんと『コーラン』の丸暗記ということが、基本なのですけれども、それにしても非常に長い教育の伝統があります。

そういう初等教育だけでなく、ちよつとそこも京都に似ているのですが、名門の学校がありまして、フェスのエコール・ノルマル・シューペリエールというのを出たらエリートなのです。ラバトが首都なのですが、ラバトの主力になっている官僚の主力は、フェスの高等学校の卒業生。そういうネットワークが全国に張り巡らされていて、高等教育のほうもそういうかたちで京都と肩を並べるようなかたちのネットワークがつくられているということがあるわけです。

七番目は、人口集中が見られて、旧市街地には老朽化した住宅が密集している。こちらも、京都もそうですけど、向こうは六層、真ん中の一番古いメディナという旧市街、そのまわりにこれと別に、あれがフランスのリョーテという元帥が計画した非常に見事なアイデアなのですが、それに接続してまったく新しいまちをつくるのですね、新市街。新市街のほうにフランス人が住んで、こちらは現地の人に住むというようなシステムにしたのです。

それで、植民地がひっくり返ったあと、革命と言いますか、フランスが引き下がったら、あとは、完全に全部フェスの人たちに。それが一層、二層ですね。そのまわりに三層ができて、さらに四層、五層、六層くらいに、時代別に地図が書けるようなかたちで都市が拡張しているのです。

しかし、メディナの一番迷宮、迷路のようなまちと言われているところは、昔のとおり古い古い生活をして、そこで子どもが少年労働に従事したりというようなことをやっているという側面もあるわけです。ですから、そういうところがある。

京都の場合も、まさに人口が、現在もまだある意味で増え続けているという感じがしますけれども、人口統計から見ると減っているように見えますけれども、まわりがどんどん京都市化しております。通勤圏が天津とか亀岡とかいうところにも、どんどん京都の外縁が広がっているという面があ

るわけですから、そういうかたちで考えますと、非常にまちの真ん中は老朽化していますけれども、外縁が広がっているという面もあるわけです。

どちらもシンボリックに、日本文化、あるいはモロッコ文化を代表する古都というところで見なされているわけです。

文明の基礎となる特徴というのは、その文化のそれぞれの文脈、つまりモロッコはイスラムの伝統とか、ヨーロッパの伝統とかいうことから離れて、文明の基礎となる要素、特徴を比較するとすれば、京都の再認識にも貢献するのではないかと気がいたします。

〈国際的な都市の交流〉

京都には、すでに姉妹都市締結四十周年を経過した都市があります。これはいろいろ具体的な名前を、これもただ機械的に挙げたのですけれども、それぞれ違うのですね、姉妹都市というのでやっているのと、友好都市とか。パリとは何か全然別のタイトルで、友好親善とか、何かいろいろなタイトルがあります。

そういうのを見るのには、このごろ便利な本がありまして、『京都一〇〇〇ドリル』（講談社）、千円ほどの本ですけれども（本体九五二円）、それを見たら、ちゃんと姉妹都市の中身を分類してあります。持ってくればよかったです。まあ、そんなことがあります。

そういうところと、姉妹都市と比較するということも、非常に面白い問題を挙げるができるのではないかと気がします。

これは、わりあい賢い選択をしていますので、ここにまだアフリカが一つも入っていませんから、フェスを入れてくださいと言っているのですけれども、それはちよつと高望みかもしれません。そういうことでございます。

それで、おしまいに、そうそう、これが、姉妹都市、パートナーシティ、友好都市、友情盟約都市と、それぞれ名前が違うらしいのです。これを、気が付いたので付け加えたのですけれども、そういうのがあるのです。

今年はいんツェの人たちが来ていまして、いんツェとの友好四

○周年記念ですか、そういうのでやっていますが、ボストンなんかも古いですね。キエフ、プラハ、ドイツのケルンも古いのではないのでしょうか。西安も古いですね。まあ、ちよつと不正確ですが、そういうのがあるわけです。

もうこれで終わりですが、いま私がお願いしたいのは、今日ご参加いただいたみなさんの一人ひとりが考えておられる、「国際」のついた京都学とは何だろうということを発表していただいて、それを将来一冊の書物にして編集できるように準備しておきたいというふうに考えています。

いろいろな京都そのものについての発見、新しい視点の提示、またあまり知られていない学説の紹介、ことに国際的な視点から見ると重要と思われるような点の指摘が望ましい。またほかの都市、ないし他文化との比較もできればいいなと思っております。

個別の主題、例えば音楽とか織物とか染め物とかというような、個別のテーマについての京都の研究も歓迎したいというふうに思っています。

今日、私が準備してきました話はこれだけです、あとご自由にご討論、ご議論いただくことにしたいと思います。

どうもありがとうございました。

米山俊直先生のご略歴

- 1930・9. 29. 奈良県に生れる
- 1954・3 三重大学農学部農学科卒業
- 1956・3 京都大学大学院農学研究科修士課程修了
- 1956・9 米国イリノイ大学社会人類学部大学院研究助手
- 1961・3 京都大学大学院農学研究科博士課程単位修得退学
- 1961・9 京都大学農学部助手
- 1965・4 甲南大学文学部助教授
- 1971・4 京都大学教養部助教授
- 1981・4 京都大学教養部教授
- 1986・12 日本生活学会 今和次郎賞
- 1988・11 農学博士（京都大学）
- 1993・11 京都新聞文化賞
- 1994・4 京都大学名誉教授
- 1994・4 放送大学教授
- 1997・4 大手前女子大学学長
- 1999. 4 紫綬褒章
- 2000・4 大手前大学学長
- 2000・6 国土交通省 淀川水系流域委員会準備会委員
- 2001・2 国土交通省 淀川水系流域委員会 猪名川部会会長

主なご著書

- 1966. 集団の生態（NHK 現代科学講座 4）
- 1967. 日本のむらの百年（NHK ブックス）
- 1969. 過疎社会（NHK ブックス）
- 1972. アメリカ人を考える（研究社）
- 1974. 祇園祭（中公新書）
- 1976. 日本人の仲間意識（講談社現代新書）
- 1977. ザイール・ノート（サンケイ出版）
- 1978. 民衆の生活と文化（未来社）
- 1979. 天神祭（中公新書）
- 1979. 暮しの探検（PHP 研究所）
- 1981. 同時代の人類学（NHK ブックス）
- 1982. 大和・河内発見の旅（PHP 研究所）
- 1985. 文化人類学の考え方（講談社現代新書）
- 1986. 都市と祭りの人類学（河出書房新社）
- 1986. アフリカ学への招待（NHK ブックス）
- 1986. ドキュメント祇園祭（NHK ブックス）
- 1988. アフリカ人間読本（河出書房新社）
- 1989. 小盆地宇宙と日本文化（岩波書店）
- 1990. アフリカ農耕民の世界観（弘文堂）
- 1990. 日本人ことはじめ物語（PHP 研究所）
- 1990. いま、なぜ文化を問うのか（日本放送出版協会）
- 1994. 同時代の人類学 新版（NHK ブックス）
- 1995. 現代人類学を学ぶ人のために（世界思想社、編著）
- 1996. 都市と農村（日本放送出版協会）
- 1997. 比較文明の社会学（日本放送出版協会）
- 2002. 私の比較文明論（世界思想社）

追悼号に御寄付頂いた方々（五十音順、敬称略）

株式会社情報工房

代表取締役 浅井俊子

河川環境管理財団

研究顧問 芦田和男

華道家元 池坊

次期家元 池坊由紀

国立民族博物館

名誉教授 石毛直道

京都産業大学

教授 井上満郎

関西大学

名誉教授 井上 宏

京都大学

名誉教授 今本博健

京都教育大学

名誉教授 井本伸廣

京都大学

名誉教授 上杉孝實

プロバスクラブ京都

理事 植田 武

京都大学

名誉教授 上田正昭

京都青果合同株式会社

取締役名誉会長
内田昌一

NPO法人 神道国際学会

理事長 梅田善美

仏師 江里康慧

財団法人 大原美術館

理事長 大原謙一郎

小川流煎茶

六代目家元 小川後楽

同志社女子大学

教授 臈谷 寿

神戸大学大学院

教授 香川孝三

株式会社京都書房

代表取締役 金岡昭治

京都大学

名誉教授 河合雅雄

有限会社ホロニック

川崎博史

書家 杭迫柏樹

いけばな京楓流

家元 小嶋京楓

作家 堺屋太一

京都大学大学院

教授 末原達郎

株式会社ミネルヴァ書房

代表取締役 杉田啓三

京都大学総合博物館

元館長 瀬戸口烈司

裏千家

家元 千 宗室

裏千家

前家元 千 玄室

株式会社世界思想社教学社

代表取締役 高島國男

株式会社プランツコーポレーション

代表取締役 武部 宏

志明院

住職 田中真澄

西陣くらしの美術館 富田屋
代表取締役 田中峰子

サントリー株式会社
顧問 津田和明

財団法人国立京都国際会館
館長 中村順一

吉田山莊
女将 中村京古

四条病院

会長 中野進

岡山大学

名誉教授 中村怜之輔

藤田興産株式会社

代表取締役 奈佐季臣子

京都大学

元総長 西島安則

柗屋

取締役 西村明美

株式会社ホテル西山

取締役 西山明巳

京都造形芸術大学

学長 芳賀徹

株式会社松栄堂

代表取締役 畑正高

中世日本研究所

所長 バーバラ・ルーシュ

京都大学大学院

教授 日置弘一郎

総合地球環境学研究所

所長 日高敏隆

日展

常務理事 日比野光鳳

京都生涯教育研究所

所長 富士谷あつ子

学校法人大手前学園

理事長 福井有

日展

理事 古谷蒼韻

京都外国語大学

学長 堀川徹志

株式会社堀場製作所

最高顧問 堀場雅夫

神戸女学院

理事長・院長 松澤員子

M・Gマーケティング研究所

所長 松田和典

京都大学大学院

教授 松田素二

藪木公認会計士事務所

所長 藪木謙一

山下織物株式会社

代表取締役会長 山下要三

京都町屋文化館

副館主 山中恵美子

京都大学

名誉教授 山田浩之

株式会社日野屋

専務取締役 山本祥古

京都大学経営管理大学院

大学院長 吉田和男

京都大学大学院

人間・環境研究科教授

ヨリッセン・エンゲルベルト

樂家15代当主

陶芸家 樂吉左衛門